

日蓮大聖人御書全集

しょうじょうだいじょうふんべつしやう

小乗大乘分別抄

新版
629
〜
637

しょうじょうだいじょうふんべつしょう

小乗大乘分別抄

ぶんえい ねん

文永10年(73)*

(富木常忍)

ときじょうにん

そ しょうだいさだ

いっすん もの いっしやく もの たい

夫れ、小大定めなし。一寸の物を一尺の物に対しては

しょう い ろくしやく おとこ たい たい ろくしやくしちしやく おとこ だい

小と云い、五尺の男に対しては六尺七尺の男を大の

おとこ い げどう ほう たい いっさい だいしょう ぶつきよう みな

男と云う。外道の法に対しては一切の大小の仏教を皆

だいじょう い だいほうとうぜん つう ぶつきよう さ

大乘と云う。『大法東漸してより』とは、通じて仏教を指

だいほう とう しゃく

ぶつきよう

して、もって大法となす」等と釈する、これなり。仏教に

い ろくおんじゆうにねん せつ しあごんきようとう いっさい しょうじょうきよう

入つても、鹿苑十二年の説、四阿含経等の一切の小乗経

しょうだいじょうきよう たい しょうじょうきよう な

をば、諸大乘経に対して小乗経と名づけたり。また

しよだいじようきよう

だいじよう

なか

おと

きよう

しよだいじよう

い

諸大乘経には、大乘の中にとりて劣る教を小乗と云

けごん

だいじようきよう

よ

しよぼう

ねが

もう

う。華嚴の大乘経に、「その余の小法を樂えるもの」と申

もん

てんだいだいし

しよぼう

つね

す文あり。天台大師は、「この『小法』というは常の

しよだいじようきよう

じゆうじ

だいほう

たい

じゆうじゆう

小乗経にはあらず。十地の大法に対して、十住・

じゆうぎよう

じゆうえこう

だいほう

くだ

しよぼう

な

しやく

たま

十行・十回向の大法を下して小法と名づく」と釈し給え

り。

ほけきようだいいち

かん

ほうべんぼん

しよだいじよう

また法華経第一の卷の方便品に、「もし小乗をもつて

ないしいちにん

け

もう

もん

てんだい

みようらく

あごんきよう

乃至一人をも化せば」と申す文あり。天台・妙楽は、阿含経

しよだいじよう

けごんぎよう

べつきよう

ほうどう

を小乗というのみにあらず、華嚴経の別教、方等・

はんにやきよう つう べつ だいじよう しようじよう さだ げんぎ だいいち

般若経の通・別の大乘をも小乗と定む。また玄義の第一

しょう え だい き ぜん とん みるごう もう

に、「小を会して大に帰せば、これ漸・頓、混合す」と申す

しやく ちしようだいし はじ けごんぎよう お はんになきよう

釈をば、智証大師は「始め華嚴経より終わり般若経にい

しきようはつきよう ごんじつ しょうだいじようきよう ぜん とん しやく

たるまでの四教八教の権実の諸大乘経を、『漸・頓』と釈

みるごう い はつきよう え いちだいえんぎよう がつ

す。『混合』と云うは、八教を会して一大円教に合す」と

判 そちら

こそ、ことわられて候え。

ほけきよう じゆりようほん しょうぼう ねが とくはく くじゆう もの

また法華経の寿量品に、「小法を樂える徳薄・垢重の者」

もう もん てんだいだいし きようもん しょうぼう い

と申す文あり。天台大師は、この経文に「小法」と云う

しょうじようきよう しょうだいじようきよう

は、小乗経にもあらず、また諸大乘経にもあらず、

くおんじつじよう と げこんぎよう えんないしほうどう はんにや ほけきよう

久遠実成を説かざる華嚴経の円乃至方等・般若・法華経の

しやくもんじゆうしほん えんとん だいほう しょうじよう ほう

迹門十四品の円頓の大法まで小乗の法なり、また、

げこんぎよう しよだいじようきよう きようしめ ほつしん ほうしん びる しやな

華嚴経等の諸大乘経の教主の法身・報身・毘盧遮那・

るしやな だいにちによらいとう しようぶつ しやく たま こころ

盧舎那・大日如来等をも小仏なりと釈し給う。この心な

ねはんぎよう だいにちきようとう いつさい だいしよう ごんじつ けんみつ しよきよう

らば、涅槃経・大日経等の一切の大小・権実・顕密の諸経

みなしようじようきよう はつしゆう なか くしやしゆう じようじつしゆう りつしゆう

は皆小乗経、八宗の中に俱舎宗・成実宗・律宗を

しようじよう い げこんしゆう ほつそうしゆう さんろんしゆう

小乗と云うのみならず、華嚴宗・法相宗・三論宗・

しんこんしゆうとう しよだいじようしゆう しようじようしゆう てんだいしゆう

真言宗等の諸大乘宗を小乗宗として、ただ天台宗

いっしゆう じつだいじようしゆう

一宗ばかり実大乘宗なるべし。

かれがれ

だいじようしゆう

よ

きようぎよう

た

彼々の大乘宗の依るところの経々には、絶えて

にじようさぶつ

くおんじつじよう

さいだい

ほう

説

たま

たと

二乗作仏・久遠実成の最大の法をとかせ給わず。譬えば、

いつしやくにしやく

いし

も

もの

だいりき

いちじようにじよう

いし

一尺二尺の石を持つ者をば大力といわず、一丈二丈の石

も

だいりき

い

けごんぎよう

ほうかいえんゆう

しじゆういちい

を持つを大力と云うがごとし。華嚴經の法界円融・四十一位、

はんにやきよう

こんどうむに

じゆうはつくう

けんねじとう

じゆうじ

ようらくきよう

般若經の混同無二・十八空・乾慧地等の十地、瓔珞經の

ごじゆうにい

にんのうきよう

ごじゆういちい

やくしきよう

じゆうに

だいがん

五十二位、仁王經の五十一位、薬師經の十二の大願、

そうかんぎよう

しじゆうはちがん

だいにちきよう

しんごん

いんけいとう

双観經の四十八願、大日經の真言・印契等、これらは、

しようじようきよう

たい

だいほう

ひほう

ほけきよう

にじようさぶつ

小乗經に対すれば大法・秘法なり。法華經の二乗作仏・

くおんじつじよう

たい

しようじよう

ほう

いつしやくにしやく

いちじよう

久遠実成に対すれば小乗の法なり。一尺二尺を一丈

にじよう たい

二丈に対するがごとし。

にじようさぶつ くおんじつじよう

ほけきよう かんよう

しよきよう

また、二乗作仏・久遠実成は、法華經の肝要にして、諸經

たい

き

ほけきよう

なか

に対すれば奇たりといえども、法華經の中にてはいまだ

きみよう

いちねんさんぜん

もう

ほうもん

き

なか

き

みよう

奇妙ならず。一念三千と申す法門こそ、奇が中の奇、妙が

なか みよう

けごん

だいにちきようとう

ぶんた

中の妙にて、華嚴・大日經等に分絶えたるのみならず、

はつしゅう

そし

なか

しんごんとう

しちしゅう

にんし

な

知

八宗の祖師の中にも真言等の七宗の人師、名をだにもし

てんじく

だいろんじ

りゆうじゆぼさつ

てんじんぼさつ

うち

たま

ふく

らず。天竺の大論師、竜樹菩薩・天親菩薩は、内には珠を含

そと

書

顕

たま

み、外にはかきあらわし給わざりし

ほうもん

法門なり。

しかるを、雨衆が三徳、米斉が六句の、先仏の教えを盗み

取うしゆ さんとく べいさい ろつく せんぶつ おし ぬす

とれるように、華嚴宗の澄観、真言宗の善無畏等は、天台

大師の一念三千の法門を盗み取つて、我が依るところの経

の「心、仏および衆生」の文の心とし、「心の実相」

だいし いちねんさんぜん ほうもん ぬす と わ よ きよう

と申す文の神とせるなり。かくのごとく盗み取つて我が

宗の規模となせるが、また還つて天台本宗をば下して、

華嚴・真言宗には劣れるなりと申す。これらの人師は、世間

の盗人にはあらねども、法の盗人なるべし。これらをよく

よく尋ね明らむべし。

しゆう きぼ かくのごとく ぬす と わ

けごん しんごんしゆう おと もう かい てんだいほんしゆう くだ

ぬすびと ほう ぬすびと

たず あき

たず あき

よく尋ね明らむべし。

せけん てんだいしゅう がくしゃ

しよしゅう

ひとびと

い

また、世間の天台宗の学者ならびに諸宗の人々の云わ

ほけきよう

にじようさぶつ くおんじつじよう

とううんぬん

く「法華経はただ二乗作仏・久遠実成ばかりなり」等云々。

いまはんきつ

い

なんだち

しやうぶく

つ

にじようさぶつ

今反詰して云わく、汝等が承伏に付いて、ただ二乗作仏と

くおんじつじよう

ほけきよう

しよきよう

久遠実成ばかり法華経にかぎつて諸経になくば、これなり

き なか き

とも、あに奇が中の奇にあらずや。

にじようさぶつ

しよきよう

ほけ

みでし

ずだだいいち

二乗作仏、諸経になくば、仏の御弟子、頭陀第一の

かしよう

ち えだいいち

しやりほつ

じんずうだいいち

もくれんとう

じゆうだいでし

迦葉・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子、

せんにひやく

らかん

まんにせん

しやうもん

むしゆおく

にじようかい

か こおんのんこう

千二百の羅漢、万二千の声聞、無数億の二乗界、過去遠々劫

みらいむしゆこう

ほけきよう

あ

より未来無数劫にいたるまで、法華経に値いたてまつらず

なが なが しきしん しきしん めつ めつ ようふじようぶつ ようふじようぶつ もの もの ば、永く色心ともに滅して永不成仏の者となるべし。あに大 おお

とが

にじようかいほとけ

かしようとう

いなる失にあらずや。また二乗界仏にならずば、迦葉等を

くよう

ぼんてん

たいしやく

ししゆ

はちぶ

びく

びくにとう

にかい

供養せし梵天・帝釈・四衆・八部・比丘・比丘尼等の二界

はちばん

しゆ

くおんじつじよう

きよう

八番の衆は、いかながあるべき。また久遠実成がこの経に

かぎ

さんぜ

しよぶつ

むじようせんめつ

ほう

だ

たと

限らずんば、三世の諸仏、無常遷滅の法に墮しなん。譬え

てん

しよじよう

にちがつ

ば、天に諸星ありとも、日月ましまさずんばいかながせん。

ち

そうもく

だいち

なんじ

地に草木ありとも、大地なくばいかながせん。これは汝が

しようぶく

承伏についての義なり。

じつ

かんが

もう

にじようさぶつ

くかい

実をもつて勘え申さば、二乗作仏なきならば、九界の

しゆじようほとけ 成

ほけきよう こころ

ほうに 理

衆生仏になるべからず。法華經の心は、法爾のことわり

いっさいしゆじよう

じっかい

ぐそく

たと

ひといちにん

かなら

として一切衆生に十界を具足せり。譬えば、人一人は必ず

しだい

いちだい 欠

ひと

いっさい

四大をもつてつくれり。一大かけなば人にあらじ。一切

しゆじよう

じっかい

えしよう

にほう

ひじよう

そうもく

いちみじん

衆生のみならず、十界の依正の二法、非情の草木、一微塵

みなじっかい

ぐそく

にじようかいほとけ

にいたるまで、皆十界を具足せり。二乗界仏にならずば、

よかい

なか

にじようかい

ほとけ

よかい

なか

余界の中の二乗界も仏になるべからず。また余界の中の

にじようかいほとけ

よかい

はっかいほとけ

二乗界仏にならずば、余界の八界仏になるべからず。

たと

ふぼ

たも

もの

きようだいくにん

ににん

譬えば、父母ともに持ちたる者、兄弟九人あらんか。二人

ぼんげ

もの

さだ

よ

しちにん

かなら

ぼんげ

もの

は凡下の者と定められれば、余の七人も必ず凡下の者となる

べし。仏と経とは父母のごとし。九界の衆生は実子なり。

しょうもん えんがく ににん ようぶじようぶつ もの ぼさつ ろくぼん

声聞・縁覚の二人、永不成仏の者となるならば、菩薩・六凡

しちにん とくどう 許 いま さんがい みな

の七人あに得道をゆるさるべきや。「今この三界は、皆これ

わ う なか しゆじよう わ こ

我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり

ないし われいちにん よ くご もん し

乃至ただ我一人のみ、能く救護をなす」の文をもつて知る

べし。

また、菩薩と申すは、必ず四弘誓願をおこす。第一の

しゆじようむへんせいがんどう がんじようじゆ だいし むじようぼだいせいがんししよう

衆生無辺誓願度の願成就せずば、第四の無上菩提誓願証

がん じよう ぜんしみ しょきよう ぼさつ ぼんぷ

の願は成ずべからず。前四味の諸経にては、「菩薩・凡夫

ほとけ 成 にじよう なが ほとけ

は仏になるべし、二乗は永く仏になるべからず」等云々。

とううんぬん

賢 ほとけ 果 無 ろくぼん とも

しかるを、かしこげなる菩薩も、はかなげなる六凡も、共に

おも われ ほとけ にじよう ほとけ

思えり。「我ら仏になるべし。二乗は仏にならざれば、か

か どう い おも にじよう 歎

しこくして彼の道には入らざりける」と思う。二乗はなげき

抱 ほとけ 悲

をいだき、「この道には入るまじかりしものを」と恐れかな

いま ほげきよう にじよう ほとけ たま とき にじよう

しみしが、今、法華經にして二乗を仏になし給える時、二乗

ほとけ 成 くかい じようぶつ 説 顯

仏になるのみならず、かの九界の成仏をもときあらわし

たま もろもろ ほとけ ほうもん き おも われ おも

給えり。諸の菩薩、この法門を聞いて思わく「我らが思い

果 無 にぜん きようぎよう にじようほとけ

ははかなかりけり。爾前の経々にして二乗仏にならば、

われ もの 我らもなるまじかりける者なり。 にじよう 一二乗を永不成仏と説き給 たも

にじよういちにん 我らもなるまじかりける者なり。 歎 一二乗を永不成仏と説き給 われ

うは、にじよういちにん 一二乗一人ばかりなげくべきにあらざりけり。 われ 我らも同 おな

じなげきにてありけり」と心うるなり。 こころ得

じゆりようほん 又また寿量品の久遠実成が爾前の経々になきことをも にぜん きようぎよう

つて思うに、おも 爾前には久遠実成なきのみならず、にぜん 仏は天下 ほとけ てんかい

第一の大妄語の人なるべし。だいいち 爾前の大乗第一たる華嚴経・ だいじようだいいち けこんぎよう

大日経等に、「始めて正覚を成ず」だい 我は昔道場に坐す」 はじ しょうがく じよう われ むかしどうじよう ざ

等云々。「真実甚深」とううんぬん 「正直に方便を捨つ」しんじつじんじん の無量義経と しょうじき ほうべん す むりようぎきよう

法華経の迹門には、ほけきよう 「我は先に道場にして」しやくもん 「我は始め われ さき どうじよう われ はじ

どうじよう

ぎ

と

きようもん

じゆりようほん

道場に坐す」と説かれたり。これらの経文は、寿量品の

われ じつ じようどう

このかた むりようむへん

「しかるに、我は実に成仏してより已来、無量無辺なり」

もん おも み だいもうご

の文より思い見れば、あに大妄語にあらずや。

ほとけ いっしん だいもうご み いっしん そな ろっこん

仏の一身、すでに大妄語の身なり。一身に備えたる六根

しよほう じつ だいこおり うえ つく もろもろ いえ

の諸法、あに実なるべきや。大氷の上に造れる 諸の舎は、

はる 迎 やが すいちゆう まんげつ まこと たい

春をむかえては破れざるべしや。水中の満月は、実に体あ

にぜん じようぶつ おうじようとう すいちゆう せいげつ

りや。爾前の成仏・往生等は、水中の星月のごとし。爾

ぜん じようぶつ おうじようとう たい したが かげ ほんもんじゆりようほん

前の成仏・往生等は、体に随う影のごとし。本門寿量品

み じゆりようほん ちえ 離

をもつて見れば、寿量品の智慧をはなれては、諸経は跨

しよきよう か

せつ とうぶん とくどうとも うみようむじつ
節・当分の得道共に有名無実なり。

てんだいだいし

ほうもん

どうじよう

ひと

かくち

げんぎ

天台大師、この法門を道場にして独り覚知し、玄義

じっかん

もんぐじっかん

しかんじっかんと書

付

たも

しよきよう

十卷・文句十卷・止観十卷等かきつけ給うに、諸経に

にじようさぶつ くおんじつじようた

よし

か

置

たも

二乗作仏・久遠実成絶えてなき由を書きおき給う。これは、

なんぼく

じっし

きようそう

まよ

さんじ

しじ

ごじ

ししゆう

ごしゆう

南北の十師が教相に迷つて三時・四時・五時、四宗・五宗・

ろくしゆう

いっとな

はんまん

さんぎよう

しきようとう

た

おし

せんじん

しようれつ

六宗、一音・半満・三教・四教等を立てて教えの浅深・勝劣

まよ

ひぎ

やぶ

がんぜん

に迷いし、これらの非義を破らんがために、まず眼前たる

にじようさぶつ

くおんじつじよう

しよきよう

しようれつ

さだ

たま

二乗作仏・久遠実成をもつて諸経の勝劣を定め給いしな

よかい

とくどう

許

り。しかりといつて、余界の得道をゆるすにはあらず。そ

のち けごんしゅう ぎきょう ほつそうしゅう さんじ しんごんしゅう けんみつ
の後の、華嚴宗の五教、法相宗の三時、真言宗の顯密・
ごぞう じゅうじゅうしん ぎしやく しくとう なんさんほくしち じっし ぎ
五藏・十住心・義釈の四句等は、南三北七の十師の義よ
りもなお誤れる教相なり。
あやま きようそつ

これらは他師のことなればさておきぬ。また、自宗の学者
たし じしゅう がくしゃ

が、天台・妙楽・伝教大師の御釈に迷つて「爾前の経々
てんだい みようらく だんぎようだいし おんしやく まよ にぜん きようぎよう

には二乗作仏・久遠実成ばかりこそ無けれども、余界の得道
にじようさぶつ くおんじつじよう な よかい とくどう

は有り」なんど申す人々、一人二人ならず、日本国に弘ま
あ もう ひとびと いちにんにん にほんこく ひろ

れり。他宗の人々これに便りを得て、いよいよ天台宗を失
たしゅう ひとびと たよ え てんだいしゅう うしな

う。これらの学者は、譬えば、野馬の蜘蛛の網にかかり、渴
がくしゃ たと やんま くも あみ かわ

しか かげろう

追

果 無

れい

よりとも

うだいしよう

ける鹿の陽炎をおうよりもはかなし。例せば、頼朝の右大将

け やすひら う

やすひら たぶら

よしつね

う

家は、泰衡を討たんがために泰衡を誑かして義経を討たせ、

だいじょうのにゆうどうきよもり

げんじ

ほろ

よ

わ

太政入道清盛は、源氏を喪ぼして世をとらんがために我

おじ

たいらのうまのすけただまさ

き

よしとも

誑

が伯父・平馬助忠正を切る、義朝はたぼらかされて

じぶ ためよし き

ひとびと

慈父・為義を切るがごとし。これらは、はかなき人々の

例

ためしなり。

てんだいだいし

ほけきよう

ほか

きようぎよう

にじようさぶつ

天台大師、「法華経より外の経々には、二乗作仏・

くおんじつじよう た

しやく

たま

ぼさつ

さぶつ

久遠実成は絶えてなし」なんと釈し給えば、菩薩の作仏・

ぼんぷ おうじよう

打

おも

われ

にじよう

凡夫の往生はあるなんめりとうち思つて、我らは二乗にも

にぜん きようぎよう

とくどう

おも

あらざれば爾前の経々にても得道なるべし、この念

しんちゆう

差 挟

なか

かんぎよう

くほんおうじよう

心中にさしはさめり。その中にも、観経の九品往生は

願 易

ほけきよう

投 捨

ねんぶつもう

ねがいやすきことなれば、法華経をばなげすて、念仏申し

じようぶつ

う

かんのん

せいし

あみだぶつ

あ

て浄土に生まれて観音・勢至・阿弥陀仏に値いたてまつり

じようぶつ

と

うんぬん

とうせい

てんだいしゆう

ひとびと

はじ

て成仏を遂ぐべしと云々。当世の天台宗の人々を始めと

しよしゆう

がくしや

して、諸宗の学者かくのごとし。

じつぎ

もう

いつさいしゆじよう

じようぶつ

ろくどう

実義をもつて申さば、一切衆生の成仏のみならず、六道

い

じつぼう

じようぶつ

おうじよう

ほけきよう

を出でて十方の浄土に往生することは、かならず法華経の

ちから

れい

にほんこく

ひと

とうど

だいいり

い

力なり。例せば、日本国の人、唐土の内裏に入らんことは、

かなら にほん こくおう ちよくじょう

必ず日本の国王の勅定によるべきがごとし。穢土を離れ

えど はな

じょうど い かなら ほけきょう ちから

て浄土に入ることとは、必ず法華経の力なるべし、例せば、

れい

たみ むすめ ないしかんぱく だいじん むすめ いた だいおう たね お

民の女、乃至閔白・大臣の女に至るまで、大王の種を下ろ

う こ おう だいおう むすめ しんか

せば、その産める子、王となりぬ。大王の女なれども、臣下

たな かいにん こ おう

の種を懐妊せば、その子、王とならざるがごとし。

じっぽう じょうど う もの さんじょう にんてん ちくしやうとう

十方の浄土に生まるる者は、三乗・人天・畜生等まで

みな おう しゆしやう な う みな ほとけ 成

も、皆、王の種姓と成って生まるべし。皆、仏となるべ

ゆえ あごんきやう たみ むすめ たみ おっと けごん ほうどう

きが故なり。阿含経は、民の女の民を夫とし、華嚴・方等・

はんをやとう しん むすめ しん おっと けごんぎやう

般若等は、臣の女の臣を夫とせるがごとし。また華嚴経・

ほうどう ほんにや だいにちきようとう えんぎよう ぼさつとう おうじよ しんか おつと
方等・般若・大日経等の円教の菩薩等は、王女の臣下を夫

とせるがごとし。皆、浄土に生まるべき法にはあらず。

また華嚴・阿含・方等・般若等の経々の間に六道を出

ずる人あり。これは彼々の経々の力にはあらず。過去に

法華経の種を殖えたりし人、現在に法華経を待たずして機

すすむ故に、爾前の経々を縁として、過去の法華経の種を

発得して成仏・往生をとぐるなり。例せば、縁覚の無仏の

世にして飛花落葉を観じて独覚の菩提を証し、孝養父母の

者の梵天に生まるるがごとし。飛花落葉・孝養父母等は独覚

ぼんてん

しゅいん

えん

かこ

と梵天との修因にはあらねども、かれを縁として過去の

しゅいん

ひ

か

てん

しやう

どっかく

ぼだい

しやう

修因を引きおこし、彼の天に生じ、独覚の菩提を証す。

かこ

しやうじやう

さんげん

しぜんこん

い

しかるに、なお過去に小乗の三賢・四善根にも入らず、

うろ

ぜんじやう

しゅ

もの

つき

かん

はな

えい

こうやうふぼ

有漏の禅定をも修せざる者は、月を觀じ花を詠じ孝養父母

ぜん

しゅ

どっかく

しきてん

しやう

かこ

の善を修すれども、独覚ともならず、色天にも生ぜず。過去

ほけきやう

たね

う

ひと

けごんぎやう

せき

はぶ

に法華經の種を殖えざる人は、華嚴經の席に侍りしかども、

しよじ

しよじゆう

登

ろくおんせつきやう

みぎり

けんじ

初地・初住にもものぼらず、鹿苑説教の砌にても見思をも

だん

かんぎやうとう

くほん

おうじやう

遂

だいしやう

断ぜず、觀經等にても九品の往生をもとげず。ただ大小

けんい

い

しやうい

登

ほけきやう

きた

の賢位のみに入つて聖位にはのぼらずして、法華經に来つ

はじ ぶつしゆ しんでん お いっしやう しよじ しよじゆうとう のぼ
て始めて仏種を心田に下ろして、一生に初地・初住等に登

る者もあり。また涅槃の座へさがり、乃至滅後・未来まで
もの ねはん ぎ ないしめつご みらい

ゆく人もあり。過去に法華經の種を殖えたる人々は、結縁の
ひと かこ ほけきやう たね う ひとびと けちえん

厚薄に随つて、華嚴經を縁として初地・初住に登る人も
こうはく したが げんぎやう えん しよじ しよじゆう のぼ ひと

あり。阿含經を縁として見思を断じて二乗となる者あり。
あこんきやう えん けんじ だん にじやう もの

觀經等の九品の行業を縁として往生する者もあり。
かんぎやうとう くほん ぎやうごう えん おうじやう もの

方等・般若もここをもつて知んぬべし。これらは彼々の
ほうどう はんによ し かれがれ

経々の力にはあらず。ひとえに法華經の力なり。
きやうぎやう ちから ほけきやう ちから

譬えば、民の女に王の種を下ろせるを、人しらずして民
たと たみ むすめ おう たね お ひと 知 たみ

このおも だいじんとう 大臣等の女に王の種を下ろせるを、人しらず

しんか こ

おも

だいおう

たず

みな

して臣下の子と思えども、大王よりこれを尋ぬれば、皆、

おうしゆ

にぜん

かいげ

いた

ひと

ほけきよう

王種となるべし。爾前にして界外へ至る人を、法華経より

たず

みな

ほけきよう

とくどう

かこ

これを尋ぬれば、皆、法華経の得道なるべし。また、過去に

ほけきよう

たね

う

ひと

こんどん

にぜん

きようぎよう

法華経の種を殖えたる人の、根鈍にして爾前の経々に

ほつとく

ひとびと

ほけきよう

とくどう 成

にぜん

発得せざる人々は、法華経にいたりて得道なる。これは爾前

きようぎよう

乳 母

后

ばら

たいし

おうじ

い

の経々をばめのととして、きさき腹の太子・王子と云う

がごとくなるべし。

ほとけ

めつご

しやうほういつせんねん

あいだ

ざいせ

また仏の滅後にも、正法一千年が間は、在世のごとく

こそなけれども、過去かこに法華經ほけきようの種たねを殖うえて法華・涅槃經ほっけ ねはんぎように

さと 残まご もの げんざいざいせ 種たね を下おろせる人々ひとびともこれ

て覺おほりのこそせる者、現在げん在世ほけきようにて種げんを下ほけきようろせる人々げどうもこれ

多おほし。また滅後めつごなれども、現げんに法華經ほけきようましませば、外道げどうの法ほう

より小乘經しょうじようきようにうつり、小乘經しょうじようきようより權大乘ごんだいじようにうつり、

しょうじようきよう 移うつ しょうじようきよう ごんだいじよう

權大乘ごんだいじようより法華經ほけきようにうつる人々ひとびと數かずをしらず。竜樹菩薩りゆうじゆぼさつ・

無著菩薩むじやくぼさつ・世親論師等せしんろんじとうこれなり。

像法一千年しょうほういつせんねんには、正法しょうほうのほどこそ無なけれども、また

過去かこ・現在げんざいに法華經ほけきようの種たねを殖うえたる人々ひとびとも少しょう々じようこれ有あり。

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

しかるを、漸々ぜんぜんに仏法ぶつぽう澆薄ぎょうはくになるほどに、宗々しゅうじゆうも偏執石へんしゅういし

固

がまんやま

たか

ぞうほう

すえ

な

のごとくかたく、我慢山のごとく高し。像法の末に成りぬ

ぶつぼう

じょうろんこうじょう

ぶつぼう

かつせん

れば、仏法によつて諍論興盛して、仏法の合戦ひまなし。

せけん

つみ

ぶつぼう

とが

むけんじごく

お

ものかず

世間の罪よりも仏法の失によつて無間地獄に墮つる者数を

しらず。

いま

まっぼう

い

にひやくよさい

かこ

げんざい

ほけきょう

今はまた、末法に入つて二百余歳、過去・現在に法華経の

たね

う

ひとびと

突果

たね

殖

種を殖えたりし人々もようやくつきはてぬ。また種をうえ

ひとびと

しょうしょう

せけん

だいかくにん

しゅつせ

ほうぼう

たる人々は少々あるらめども、世間の大悪人・出世の謗法

もの

かず

くに

じゅうまん

たと

たいか

なか

しょうすい

の者、数をしらず国に充満せり。譬えば、大火の中の小水、

たいか

なか

しょうか

たいかい

なか

みず

だいち

なか

こがね

大水の中の小火、大海の中の水、大地の中の金なんどのご

あくじゅう

とく、悪業とのみなりぬ。また過去の善業もなきがごとく、

かこ

ぜんじゅう

げんざい ぜんじゅう

験

みだ

みょうごう

ひと

現在の善業もしるしなし。あるいは弥陀の名号をもつて人

くる

ほけきよう 捨

はいじようこうげ

失

を狂わし、法華經をすてしむれば、背上向下のとがあり。

ぜんしゅう

た

きようげ

しよく

ぶつきよう

しん

ほう

あるいは禅宗を立てて教外と称し、仏教をば真の法にあ

べつじよ

ぞうじようまん

お

ほつそう

さんろん

らずと蔑如して増上慢を起こし、あるいは法相・三論・

けごんしゅう

た

ほけきよう

くだ

しんごんしゅう

だいにちしゅう

華嚴宗を立てて法華經を下し、あるいは真言宗・大日宗と

しよく

ほけきよう

しやかによらい

けんきよう

しんごんしゅう

およ

称して、「法華經は釈迦如来の顕教にして真言宗に及ば

とこうんぬん

ず」等云々。

じねん

ほうもん

まよ

もの

しし

しかるに、自然に法門に迷う者もあり、あるいは師々に

まよ もの

がんそ ろんじ

にんし

めいほう

とし

よつて迷う者もあり、あるいは元祖・論師・人師の迷法を年

ひき しんじつ

ほう

つた

きた

もの

あつき

てんま

久しく真実の法ぞと伝え来る者もあり、あるいは悪鬼・天魔

み い 替

あくほう

ひろ

しょうほう

もの

の身に入りかわりて悪法を弘めて正法とおもう者あり、あ

しょうじょういちぢ

しょうほう

だいほう

ぎょう

るいはわずかの小乗一途の小法をしりて大法を行ずる

ひと

がまん

わ

しょうほう

ぎょう

人はしからずと我慢して、我が小法を行ぜんがために

だいほう

ひほう

さんじ

もの

じひま

大法・秘法の山寺をおさえとる者もあり、あるいは慈悲魔と

もう

まみ

い

さんねいっぼつ

み

たい

しょうじょう

いっぼう

申す魔身に入つて、三衣一鉢を身に帯し、小乗の一法を

ぎょう

輩

しょうほう

たも

こくちゆう

とうりよう

行ずるやから、わずかの小法を持って、国中の棟梁た

ひえいざん

りゆうぞう

ちしや

いちぶんわ

おし

る比叡山、竜象のごとくなる智者どもを、一分我が教えに

違あつけんみ じゃけん もの あくにん 打 おも
たがえるを見て、邪見ごくしゅの者、悪人おうわくなんどうち思えり。しょうほう

この悪見あつけんをもつて、国主こくしゅをたばらかし誑惑誑して、正法の

御帰依ごきえをうすうなし、かえつて破国はこく・破仏はぶつの因縁いんねんとなせる

なり。かの姐己だつき・褒姒ほうじなんど申せし後は、心こころもおだやか

に、みめかたち人見目形ひとにすぐれたりき。愚王ぐおう、これを愛あいして国くにを

ほろぼす縁えんとなる。当世とうせいの禅師ぜんじ・律師りつし・念仏者ねんぶつしやなんど申す

聖一しょういち・道隆どうりゆう・良観りようかん・道阿弥どうあみ・然阿弥ねんあみなんど申す法師もうども

は、鳩鴿きめうこうが糞ふんを食するがごとく、西施せいしが呉王ごおうをたばろかし

しに似にたり。あるいは我が小乘わ臭糞しょうじようしゆうふんの驢乳ろにゆうの戒かいを持つて。